



補助動詞「やる」の基底に存在する認識について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): converb "yaru", conflict, controllability, speaker's recognition 作成者: 松本, 敏治, 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2855

補助動詞「やる」の基底に存在する認識について

その他（別言語等） のタイトル	Cognition underling converb "yaru" in Japanese
著者	松本 敏治, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	48
ページ	117-123
発行年	1998-11-13
URL	http://hdl.handle.net/10258/2855

補助動詞「やる」の基底に存在する認識について

松本 敏治*, 塩谷 亨*

Cognition underlying converb "yaru" in Japanese

Toshiharu MATSUMOTO and Toru SHIONOYA

(原稿受付日 平成10年 5月 8日 論文受理日 平成10年 8月31日)

Abstract

Two kinds of usage are found in the dictionaries on the converb "yaru", i.e., (i) expression of benefactive action to others, and (ii) expression of negative feeling. The usage (ii) seems to be contradictory to the usage (i). The present paper analyzes the recognition behind the usages of the converb "yaru" and attempts to establish a generalization which cover both of two usage. The converb "yaru" shows the speaker recognizes (i) that there is a conflict, (ii) that the actor can solve CONFLICT, and (iii) that the actor has CONTROLLABILITY. It also explains how the usage of "yaru" affect the rank of the persons concerned, and the usage of other benefactive converbs such as "kureru" and "morau".

Key words : converb "yaru", conflict, controllability, speaker's recognition

1.序

発話において特定の言語表現が選ばれるのは、単純に客観的状況にのみ依存するのではなく話者の認識、意図、感情などのさまざまな話者側の要因による。話者は、自らの認識、意図、感情を表現するための適切な言語表現をボキャブラリーの中から探し出そうとする。時には、適切な表現を探し出すことも出来る。だが、時には、自らの思いを表現出来ないもどかしさにとられる。一方、聞き手は言語表現の中に話者の認識を読みとる。話者が使用したことばや言い回しの中から話者がどのような認識、意図、感情を持っているかを理解しようとする。この場合にも時には適切に読みとることも出来るが、時に読み違いが生じる。言語は、厳密に事実を伝えるとともに、話者の認識、意図、感情を伝える。

本稿の目的は、話者が使用する語と認識・意図・感情の関連、および聞き手による話者の認識・意図・感情の推論のメカニズムを明らかにする事である。具体的には、言語表現が認識・意図・感情と結びついている側面を表す一例として補助動詞「やる」について分析を行う。事実についての表現は本動詞においてなされるので、補助動詞「やる」は話者の認識、意図、感情と結びつく可能性が高く、また、分析の場面で出てくるように、非常にドラマチックな場面において利用されることなどから、話者の認識、意図、感情を分析するのに適切と思われたためである。

1.1 補助動詞「やる」の辞書的定義

補助動詞「やる」について辞書はつぎのように定義している。

広辞苑 第4版

1. 同等以下のもののために労を執り、恩恵を与える意を表す。狂、三人片輪「いかにも、かかえて-ろう」
「読んで-ろう」

* 共通講座

2. 相手に不利益を与える意を表す。「殺してー・る」「家でしてーる」

三省堂 大辞林

1. 何らかの動作を他に対して行う意を表す。「紹介状を書いてーる」「本を読んでーる」

2. 話し相手が強い気持ちで投げやりに言い放つ意を表す。「手紙の返事を書かないで、ほうっておいてーった」

講談社 日本語大辞典

1. 他のために...する。「用いてー。」

2. 怒り, 憎しみの気持ちで相手に接する。「怒ってー。」

3. やけになって, する。「あてつけに死んでー。」

これらの定義は, 大きく二つの意味に分けられる。一つは, 他者への恩恵・利益を与えることを意味する場合で, 他方は, 他者への否定的感情の表出を意味する場合である。他者への恩恵・利益を与える意味に対応する定義としては, 広辞苑の1, 日本語大辞典の1が含まれる。また大辞林の「何らかの動作を他に対しておこなう」とするものも, その用例から見て, この意味の範囲に含まれると考えられる。多者への否定的感情の表出に対応する定義は, 広辞苑の2, 大辞林の2, そして日本語大辞典の2, 3が対応する。このように辞書では, 「やる」は, 一方で他者への恩恵・利益, 他方で他者への否定的感情の表出というまったく対極的な意味を有しているように見える。

1.2 「やる」についての言語学的分析

「やる」についてその恩恵・利益の側面からなされた言語学的分析として金田一春彦¹⁾などがあり, 他方, 話者の視点や立場に基づく分析として久野²⁾, 宮地³⁾らの分析がある。

久野²⁾は受益補助動詞の用法は話し手の視点の問題であるとして, 「やる」が用いられるのは, 話し手の視点が非主語よりも主語よりである場合と分析している。宮地³⁾は受益補助動詞に関して, 文の主語, 話し手の立つ側, 実際の行為の主体, 「やる」の主体の計4つの要素の相関関係としてとらえ, 「やる」が用いられるのはこれらすべてが一致している場合であると分析している。話者の視点, あるいは話者の立場という要素に着目したこれら2つの分析は, 他の受益補助動詞を含めた体系化に有益なものである。しかし, 彼等の分析は, 「やる」「もらう」「くれる」などの受益動詞全体に対するものであるため, 上述の第二の意味, 否定的感情の表出についての問題は中心的議論とは成り得ていない。つまり, 第二の意味についての分析も, 第一の意味と第二の意味の関連についての議論もなされているとは言えない。また, 久野²⁾, 宮地³⁾の分析はどちらかといえば, 文法的なものであり, 従って, 本稿で扱うような問題, すなわち, 実際の補助動詞「やる」の否定的感情表出のメカニズムについて言及し得ない。

分析を始めるに当たって, 本稿では恩恵・利益を表す場合を「やる¹⁾」, 否定的感情の表出の場合を「やる²⁾」と

便宜的に表現することとする。

2. 「やる」についての分析

2.1 恩恵・利益を表明する時に使われる「やる¹⁾」について

恩恵・利益を表す時に使われる「やる」の場合, 誰かが他者の利益のために何かを行う状況を記述するものと見なされる。

ゆえに, これらの動詞を含む文章では, 「誰々のために」という句を明示的あるいは暗示的に含んでいることとなる。たとえば,

1 (彼女のために) 僕が本を読んでやる。

などである。しかしこの際, 行為者と恩恵を受ける人物が同一であることは許されない。

2 *(僕のために) 僕が本を読んでやる。

という文章は不自然であり, この場合は, 動詞を「読む」と変えることでより自然な表現となる。

3 (僕のために) 僕が本を読む。

つまり, 「やる¹⁾」は, 行為者と利益あるいは恩恵をうけるもの(受益者)が同一ではないことを示唆している事となる。

また話者と行為者は同一であっても, 別人であっても構わない。

4 (彼女のために) 彼が本を読んでやる。

という文は問題がない。

また話者と受益者は同一であってはならない。

5 *(僕のために) 彼女が本を読んでやる。

は不自然な文であり, この場合は

6 (僕のために) 彼女が本を読んでもくれる。

あるいは

7 (僕のために) 彼女に本を読んでもらう。

となる。

ゆえに, 話者・行為者・受益者については, 行為者と受益者が同一ではない, また, 受益者が話者ではないという制限が存在する(Fig. 1)。

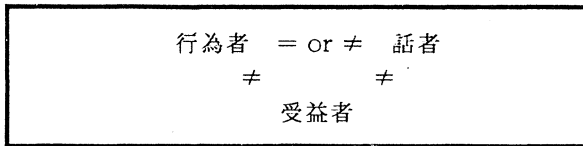


Fig. 1 「やる¹」における行為者、話者、受益者の関係

2.2 否定的感情の表出の際に使われる「やる²」について

しかしながら、「やる」には、行為者が他者に恩恵や利益を及ぼさない状況で使われる事例が存在している。たとえば

8 殺してやる

という文を考えてみよう。短い文であるため、状況によって意味合いは変化するが、ここでは次のような状況において発せられた場合を考える。二人の人物の間になんらかの諍いが生じ、一方の人物が怒りにかられ8の文を口走った。「やる」動詞が受益補助動詞であるとする何者かがこの行為によって恩恵あるいは利益を受けなければならない。つまり

9 (誰々のために)殺してやる

という意味を持つはずである。この場合、第三者はこの場面に介在していないので、受益者/恩恵者は二人の当事者のうち一方でなければならない。殺してやると叫ばれた相手(聞き手)は、殺されるという自己にとってもっとも不利益な行為の対象であるから受益者とは見なし得ない。となれば、行為者でもある話者が受益者となる。だが先にのべたように「やる」動詞は、受益者と行為者は別な人物であることを示唆している。

- 10 a.*(私のために)(私が)殺してやる。
b.(私のために)(私が)殺す。

上の2つの文を比較した場合、Bがより自然な文章と見なされる。このように受益者が明白でない事例は、「やる」の受益補助動詞としての説明を受け入れない。

2.3 外部起因

では、このような「やる²」についてどのような解釈が可能であるのか。ここでは、次のような状況下の「やる」について分析を進める。

- 1.他人の利益・恩恵とならない。
- 2.(典型的には)言い切り。
- 3.宣言

たとえば、上述のような状況での「(職場や学校を)や

めてやる」「死んでやる」「殺してやる」「(試験に)受かってやる」「金メダルをとってやる」などである。

最初に結論をのべるなら、これらの場合の「やる²」は、話者がその行為を行うに至る原因の一部を外部に求め、一方、行為を行うか否かの決定が行為者自身の意志と能力によっていることを示す場合に用いられる。

11 (学校を)やめてやる

では、行為の採否は最終的に学生が決定したにしても、学生はそのような行為に至らせた原因の一端が外部に存在すると見なししていることを示唆する。この際、その原因の一端が客観的に教官や大学に帰属するか否かは問題ではない。学生が、そこに原因を見いだしていることが重要なのである。

このことは、この発話を聞く第三者を想定することで検証できる。学生が教官に向かって上述のような発言をしたとする。側でそれを聞いた第三者は、学生の発言を聞いただけで、学生がやめるという発言をした原因の一端が教官あるいは大学組織にあることを容易に推測できる。また、学友にむかって「(学校を)やめてやる」という宣言をおこなった場合でも、同様にその発言の原因の一端が話者である学生の外部に存在することを推測できる。

2.4 コンフリクト

このように外部起因によって生じた問題で、話者が行為者の行為によって解決が計られると見なす問題を本稿ではコンフリクト(葛藤)と呼ぶ。補助動詞「やる」は、発話者が見なすコンフリクトが存在すること、および、文の中の行為はそのコンフリクトの解決の手段となっていることを意味している。「やめてやる」では、教官との間に生じた諍いが学生の「やめる」という行為によって解決がもたらされると話者である学生が認識していることを示している。

- 12 a.死んでやる
b.殺してやる
c.(試験に)受かってやる
d.金メダルをとってやる

についても、同じく、側でこの発言を聞いた第三者はこのような発言あるいは決意表明の中に、話者がみなすところのコンフリクトを推測することが出来る。

また、小泉他⁴⁾は、「やる」の意味として「ある行為をする決意をする」をあげている。しかし、「やる」は単なる意志ではなく、先ほど述べたようにその背後にコンフリクトが存在していることと、その解決は行為者によってなされることを意味しているのである。

例えば、

夫が妻の出した手料理を前にした際の「食べるよ」と「食べてやるよ」を比較してみよう。もし、「やる」が単

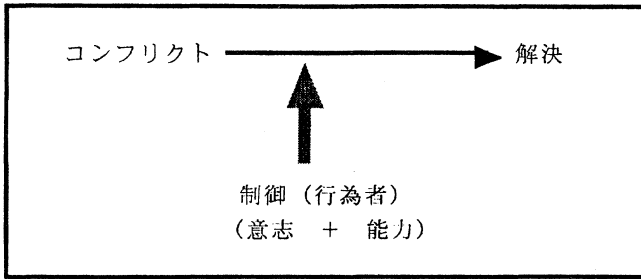


Fig. 2 「やる」におけるコンフリクトと制御の関係

なる意志の表現であるならこの2つには食事するという意志表現として同等であるはずである。これについて読者は、透明人間となってこの二人の会話を盗みぎきするとする。あるいは、偶然付けたテレビのなかの食卓で夫が妻にむかってこのことばを発した場面を聞いたとしよう。この二人が夫婦喧嘩をした直後と、夫が家に帰ってきた直後を想像していただきたい。どちらの言語表現がどちらの場面に適合するであろうか。通常は、「食べてやるよ」は夫婦喧嘩の後に、「食べるよ」は夫が帰宅した場面により適合すると見なされる。これは補助動詞「やる」にはそれ自体が以前にコンフリクトが存在していたことを表しているためである。しかも、この「たべる」という行為によってそのコンフリクトの解決が計られるのであるから、コンフリクトの内容は食事をとる、とらないであることも推測できる。したがって、「やる」は単なる意志ではないことがこのことから明らかとなる。

2.5 制御性

また、「やる」において、コンフリクトの存在とともに重要と考えられるのは、行為者のコンフリクトへの制御性である。行為者は、コンフリクト状況に対して、その状況を解決するだけの能力とそれを実行する意志を持っている。たとえば、冒険物語の中で、旅人が旅の途中、怪物と出会ったとしよう。この怪物は、「おまえをくってやる」という言語表現を用いたとしてもまったく違和感はない。むしろ「おまえをくう」よりもより場面に適した感じを与える。これは、怪物が、旅人との出会いをコンフリクトと見なし、自らがこの状況を解決する決定権を握っているという認識を持っていることを表している(Fig. 2)。この場合は、怪物は自らのこの場面に対する制御を認識している。ゆえに「くってやる」以外の選択肢、「逃がす」などにも同様に「逃してやる」のように「やる」をつけることが出来る。繰り返しになるが、この状況において誰が支配権を握っているのかは、話者の主観的な認識によっている。実際には、怪物は旅人によって倒されてしまうかもしれない。逆に旅人がこの状況を自らの力で解決しようと考えれば、彼は「おまえ(怪物)を倒してやる」「逃げてやる」という表現を使用するであろう。

以上の事例は、言い切りで宣言という事例であった。そのため、行為者と話者が同一であり、コンフリクトや制御の認識が話者のものか、行為者であるかが不分離であっ

た。そこで以下で行為者と話者が一致しない例を分析する。

13 a. (ボスが手下に) 強情をはるようなら、こいつをころしてやれ。

(こどもが友人に学校の成績の不出来をなじられているのを聞いた親が)

b. おい、こうなったら東大にうかってやれ

c. おまえをバカにした世間を見返してやれ

d. そんな会社、首にされる前に自分から辞めてやれよ

例13は、言い切り、宣言ではないが、受益者が明白ではなく、他人の利益・恩恵として説明できない事例である。従って「やる」の例と見なされる。

ここでは、話者がコンフリクトを認識し、その解決を聞き手/行為者の行為に求めている。そこで、話者はコンフリクトへの制御性が行為者に備わっていると認識し、解決のための行為を行うことを行為者に要求している。

2.6 受益補助動詞「やる」におけるコンフリクトと制御

それでは、上述のような図式にしたがって受益補助動詞「やる」について考えていくとする。受益補助動詞「やる」の典型として「とってやる」を取りあげる。これは受益者は、何かものをとってもらうという利益あるいは恩恵を受けている。その意味で受益補助動詞の例と見なしてよい。

14 (君のために)(僕が)(パンを)とってやる

これを「話者が行為者の外部にコンフリクトの存在を認知し、行為者がそのコンフリクトを解決する能力をもっており、自らの意志でその行為を行いそのコンフリクトを解決する」という視点で解釈を試みる。コンフリクトは、「君がパンをとりたいが、まだそれを手に入れていない状態」である。話者は、この状態において「行為者はそのコンフリクトを解決する能力を自らがもっており、自らの意志で、パンを相手に渡し、コンフリクトを解決する」ことを表明している。

また話者と行為者が一致しない事例を次にあげてみる

15 (彼女のために)(彼が)パンをとってやる

この場合、話者は「彼女が何らかのコンフリクト状況」にあり、「行為者は、そのコンフリクトを解決する能力をもっており、その意志もあつたので、パンを相手に渡し、コンフリクトを解決する」ことを意味している。ここで重要であるのは、このコンフリクトに対する強い制御性は行為者にあるのであって、話者にあるのではない。話者にあるのは、コンフリクトが存在しているという認識と、行為者

がそれを解決するための強い制御性を有しているという認識である。

つまり、「やる¹」「やる²」ともに同様の認識過程がその基底に存在していると考えられる。

以上のように「やる¹」「やる²」ともに同様の認識がその基盤にあるとすれば、なぜ受益補助動詞としての「やる¹」と否定的感情の表出の「やる²」という意味的差異が生じることとなるのか。この問題を考えるには制御性について考察を進めなければならない。

3. 制御性と関連する問題

3.1 制御性と対人的上下関係

通常は個々のコンフリクト状況においては解決の手段を持つ者が強い制御性をもつこととなる。社会的役割が上位の者が、強い制御性を有している。例えば、部下と上司の間で何らかの諍いが持ち上がった場合、上司は部下に対して強い制御性をもっている。コンフリクトの解決の決定権は上司に帰属する。このようなコンフリクト状況における制御の強さの差は上下関係に起因する。

補助動詞「やる」は、コンフリクトの解決について強い制御性を行為者がもっていることを示していた。

いま、二人の人物を想定する。一方の人物が補助動詞「やる」を用いて、自己がある行為を行うことで、存在するコンフリクトを解決する旨を表明したとする。これは、コンフリクト状況における自らの制御性を宣言することとなる。一方、もう一方の当事者である人物は、聞き手として存在する。彼は、コンフリクトに対する制御性を宣言していない。とすれば、話者は、自らと聞き手の間にそのコンフリクト状況に対する制御性の差を宣言したこととなる。そして、この制御性の差は対人的な上下関係と結びつく。つまり、この場合、話者は聞き手に対して自らがより上位の位置にあることを宣言している。

例えば、会社で部下が上司に対しておこなった

16 やめてやる

という発話は、通常の意味での制御の差を逆転させることを意味している。このような発話をすることで、部下である行為者は、会社の中に存在していた上下関係にもとづく制御の強さの差-上司>部下-という関係を逆転させ、このコンフリクト事態を自らの制御の下、解決を図った、つまり自分を上司に対して上位においた、という認識に至るのである。このように考えると、学生や会社員が単に「やめる」とう表現ではなく「やめてやる」という表現を用いることの意味が明白となる。つまり「止めてやる」とうことばの中には、外部との間にコンフリクトが存在したこと、そして自らの制御下でそれを解決し、自らが相手に対して上位に存在であるという意味が含まれている。このように「やる」は、通常の意味の社会的役割にもとづく制御性や上下関係を逆転させるという目的に用いられることもある。

小泉他⁶⁾は、「やる」の用法の中に「目下の人・動物植物などに何かをする」をあげている。これは、「やる」のもつ制御性と対人的上下関係に依存した用法と考えられる。

3.2 否定的感情の表出

以上のように、「やる」が話者と聞き手の間に新たな上下関係を引き起こすとして、それは聞き手にとってどのように認識されるのか。対人的な上下関係と発話による上下関係に矛盾がない場合、特別の問題を引き起こさない。例えば、上司が部下に対して「飯をおごってやる」という場合などである。この場合、聞き手の部下は、上司が上位に位置することになんらの疑問も持たない。しかし、対人的な上下関係と発話によって生じた上下関係に矛盾が生じる場合が存在する。たとえば、対人的な関係が同等である二者において「やる」を含む文章が発話された場合である。同じ大学の同級生同士で

17 心理学のノートを貸してやる

という発言が一方からなされた場合、この発話は話者を上位に聞き手を下位に位置づけることを意味する。対人的に同等と考えている相手との間でのそのような上下関係の表明は、聞き手にフラストレーションを引き起こす。しかし、聞き手にとって話者の行為によって得られる利益が十分であれば、それから得られる満足はそのフラストレーションを補償することとなる。しかし、もし、聞き手の学生が既に他の学生から心理学のノートを手に入れていたとすれば、話者の行為によってはなんら利益をもたられず、下位に位置づけられたとするフラストレーションのみが残ることとなる。また、対人的に下位の者が上位の者に対して「やる」を用いた場合にも同様のことが生じる。このフラストレーションに対する利益の補償の程度は、聞き手が話者との対人的関係をどのように見なしているか、利益をどの程度と見積もっているかによって変わってくる (Fig. 3)。

つまり、コンフリクトの当事者同士で会話がなわれた場合、「やる」は当事者間での相対的地位を表明することとなる。聞き手は、利益が十分である場合は、相対的位置の低下に伴うフラストレーションを補うことが可能であるが、利益が十分とみなせない時フラストレーションが残る

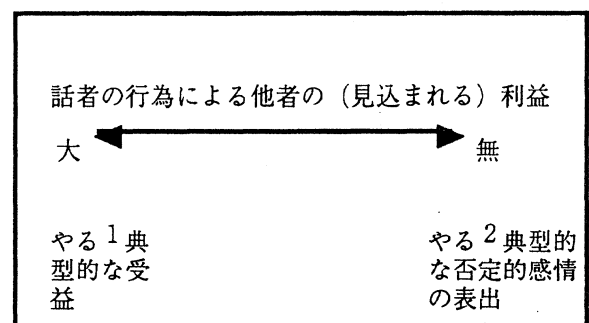


Fig. 3 「やる」の2つの用法における利益の差

こととなる。また時に、話し手は、利益を与えないあるいは少ない利益しか与えない状況での「やる」の使用が聞き手にフラストレーションをもたらすことを認識している。これが、「やる」が否定的感情の表出と見なされる原因である。

しかし、フラストレーションを感じさせる相手が存在しない場合もあり得る。たとえば、

18 大学に受かってやる

では、特定の人物との相対的地位が問題となっていわけではない。ここでは、行為者がコンフリクトに対する自己の制御性を宣言していると見なすことが出来る。

4. 受益補助動詞「くれる」「もらう」

4.1 「くれる」「もらう」のコンフリクトと制御性
他に受益補助動詞として分析が行われる「くれる」と「もらう」についても、「やる」と同様にコンフリクトと制御性で説明が可能であろうか。

19a.(彼女のために)(彼が)(パンを)とってやる。

b.(彼女が)(彼に)(パンを)とってもらう。

c.(彼女のために)(彼が)(パンを)とってくれる。

これらはすべて、話者がみなすところのコンフリクトの解決のための行為を表している。また、行為者がコンフリクトの解決に対して強い制御性を持っているということでも共通している。

以上をまとめるとTable 1のごとくなる。

Table 1

表現	話者が見なすところの		
	conflictの存在	受益性	行為者の制御性
する	±	±	±
やる1	+	+	+
やる2	+	-	+
もらう	+	+	+
くれる	+	+	+

これらは多かれ少なかれ、コンフリクトに対する行為者の制御性を表している。しかしながら、少ないながら一見例外的に見える用例も存在するのでそれについて言及しておく。

例えば、「死んでくれた」や「死んでもらった」などである。これは行為者自身が自らの制御の下、死という行為に至ったのではない場合においても用いられる。にも関わ

らずこれらの表現には行為者が自らの意志で死を選び、あるコンフリクトを解決したかのような意味が読みとれる。

19 あいつには死んでもらおうと思っていたが、こちらが手を出す前にあいつが勝手に死んでくれた

この場合の「死んでもらう」と「死んでくれる」は両方ともコンフリクトが行為者の死によって解決されることを意味している。ここでのコンフリクトの存在は、行為者自身は必ずしも認識していないかもしれない。このコンフリクトは話者にとって存在すればよい。「死んでもらう」では、行為者には制御性はなく、制御性は話者にある。これは、「殺す」という非常にネガティブな行為の実行について、それを直接的に自己の制御下に行うという表現をさけるためこのような表現法が選ばれたと考えられる。一方、「死んでくれた」では、もちろん、実際に「あいつ」が「死ぬ」に際して制御性をもってたということではないが、こちらでなにもしなかったのに死んだということを強調するため、あたかも、行為者が制御性をもってたかのような言い方をしている。

4.2 「もらう」「くれる」における話者、受益者、行為者の関係

4.2.1 「もらう」

20. a. 私が 彼に パンを とってもらう。

b.*彼女が 私に パンを とってもらう。

c.*彼が 彼に パンを とってもらう

aは、自然であるので話者と受益者は一致してもよい。bの文は不自然と感じられるから、「もらう」では話者と行為者は同一であってはならない。cの文は、不自然であるので受益者と行為者が一致してはならない。

4.2.2 「くれる」

21 a. 私のために 彼が パンをとってくれる

b.*彼女のために 私が パンをとってくれる

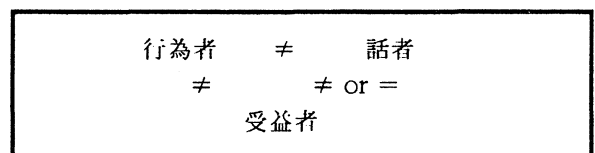


Fig.4 「もらう」「くれる」における行為者、話者、受益者の関係

c.*彼女のために 彼女が パンをとってくれる。

aは、自然であるので話者と受益者は一致してもよい。bの文は不自然と感じられるから、「くれる」では話者と行為者は同一であってはならない。cの文は、不自然であるので受益者と行為者が一致してはならない。

ゆえに「もらう」「くれる」ともにFig.4のような図式が成り立つ。

ただし「くれる」と「もらう」では主語が入れ替わっている。「もらう」では、主語が受益者であるのに対して、「くれる」では主語は行為者である。

5. まとめ

補助動詞「やる」の意味には、他者への恩恵・利益（やる¹⁾）、他者への否定的感情の表出（やる²⁾）という相反する2つの側面が有る。本論では「やる」の背後にある認識を分析し、対極的に見える2つの意味の普遍性を見いだそうとした。「やる」の使用にあたっては、1) コンフリクトの存在、2) 行為者によるコンフリクトの解決可能性、2) 行為者の制御性という3つの要因が話者に認識されている必要があることが明らかとなった。また、上述の分析から「やる」が持つ対人的上下関係におよぼす効果が説明された。さらに、受益的補助動詞「くれる」「もらう」についても同様の分析が出来ることを示した。

以上のように「やる」の使用は、特定の認識・意図・感情がその本質的条件となる。聞き手は、「やる」の背景にある話者の認識・意図・感情を推測することとなる。

引用文献

- (1)金田一春彦 1955 「日本語文法」市川三喜・服部四郎編 世界言語概説 下巻 研究社
- (2)久野すすむ 1978 談話の文法 大修館書店
- (3)宮地裕 1979 「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について。川本茂雄ほか編、日本の言語学 第5巻 意味・語彙編 235-256
- (4)小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義男・塚本秀樹編 日本語基本動詞用法辞典 大修館書店

謝辞

本稿の作成にあたって、室蘭認知科学研究会の方々に貴重な御意見・御助言をいただきました。感謝いたします。